

老婆

小川未明

青空文庫

老婆は眠っているようだ。茫然とした顔付をして人が好そうに見える。一日中古ぼけた長火鉢の傍に坐つて身動きもしない。古い煤けた家で夜になると鼠が天井張を駆け廻る音が騒々しい。障子の目は暗く紙は赤ちやけているが、道具というものはこの長火鉢の外に何もなかった。私は終日外に出て家にいることが稀だから、何様ものを食べているか食事するのを見たことがない。私はただ二階の六畳を借りているばかりで、食事はすべて外で済して帰る。私が遅く帰る時分には、暗いランプの下に老婆は茫然と坐っている。それが朝出る時に見たと同じ方面に対して同じ様子で少しも変りがない。

私が借りた二階の六畳の壁は青い紙で貼てあった。高窓が表向になつて付いているばかりで、日も当たらない、斯様汚らしい処を借るつもりでなかったが、値段が安くて、困っている当時のものだからつい入ることにしてしまった。私が間を見に来た時も、やはり婆さんはこうやつて坐っていた。婆さん一人で住んでいるのかと聞いたら、やはりそうだと答えた。子も孫もないようだ。何して食つて行くのか分らない。何もせずに坐っているばかりだ。私はただ間を借りたばかりで家では飯も食わないのだから話す機会もない。夜遅く帰えつて朝早く務めに出てしまふばかりだ。それでも気味悪く思ったものだから、工

場から帰える時に二尺ばかりの鉄棒かなぼうを一本持つて帰つて戸棚の隅すみに隠して置いた。けれど婆さんは決して二階などへ上つて来たことはない。私も別に下りて行て話しかけたこともない。偶々たまたま便所に行く時など下へ降ると婆さんは暗いランプの下で眠じつと彼方あちらを向いて黙つて坐つてゐる。私も声をかけなければ婆さんも声をかけたことがない。その時ちらと横顔を覗くと茫然とした顔付で、何処どこか優しみのある、決して悪相あくそうを備えている人柄の悪い婆さんでないと思うので、日頃婆さんを気味悪く思つたり、悪く思つてゐるのが気の毒になつて、つい、

「お静しずかな晩ですね。」と声をかけてしまふ。すると婆さんは、きつと小さな咳をつづけさまに三つばかりやつて、

「そんな……静かな晩だな。」と答える。その声がなんでも何処か、誰かに似ているなど思うが、未いまだにその人のことが考え出されない。私は、その儘頭ままを傾げて便所に行き又二階へ上つてしまふ。二階へ上つてしまつてから、婆さんの声が誰かに似ている——何なんでもその似ている人というのが自分と曾かつて直接に物を言つたことのある人らしく思われた——誰だつたらうと考える。遂に思い出せなく、何気なにのせいだといつて寝てしまふ。下では何時頃婆さんが眠るものか、……それとも夜中よじゅうああやつて、やはり坐り通して明あかすのかも

知れないが、明る朝起きて下へ降りて見る頃には、きつといつもの様子で、同じ方角に向いて坐っているのである。しかし私は決して真夜中には下へ降りなかった——たとえ、人の好^{よき}そうな婆さんでも何だか空怖しい気がして下^{おり}る気になれない。婆さんの頭は白髪である。それに平常^{へいぜい}は汚れた手拭^{てぬぐい}を被^かつて、紺^{くろ}ぽい手織縞^{わたいれ}の綿^{わた}入^{いれ}を二枚重ねていた。

私が、間を借りたのは秋の末で冬に近かった。もう霽^{みぞれ}が降る季節であった。けれど婆さんの坐っている傍の古ぼけた火鉢にはたえず火種^{かたぐ}のあつたことがない。絶対的に火を起さないものと思われた。私は夜帰つて来て火を起すのも大儀だから直ぐ毛布^{ケット}にくるまつて寝てしまう。朝は早く飛び出して、工場へ行き石炭の火の赤く燃え上つたので温^{あた}まる——だから、此家^{ここ}に限^こつて火の気というものが一年たつたてありやしない。とても此^こん家^なには長くいられない。早く逃げ出そう逃げ出そうと思つていて、間代^{まだい}の安いのと、婆さんが決して悪者ではないと思つたので急がずに、もはや来てから二週間ばかりも過ぎた。或日私は、それでも家を探^{たず}ねようと思つてぶらぶら寂しい町を歩いていた。

この日は空は灰色に曇つて、風が寒かった。道行く人の姿は悄^{しんぼり}然^{ぜん}として、折々^{おりおり}落葉^{らくえつ}を巻いて北風^{ひきかぜ}が氷雨^{ひきこめ}を落した。私は、貸間の張札を探ねて、遂に探ねあぐんで疲れた足を引摺^{ひきず}つて町^{まち}端^{はづれ}の大きな病院の石垣の下に來ると彼方に歩いて行く後姿はまさしく我

家の婆さんである。

ハテ不思議な、今迄あの婆さんの家出をしたのを見たことがないが、今日に限って何処へ行つたのだろうか。もう帰る途なのか、それともこれから用をたしに行くのか、それとも自分がいない留守には毎日このように出歩くのかも知れない……などいろいろに考えて見た。けれどあの婆さんが出るようなことは決してない筈だと思つた。ただ固くそう信じたのである。正しく人違いであろうと彼方に杖を突きながら、とぼとぼと行く婆さんの後を追つて見た。漸く近づいて見るとやはり婆さんだ。白髪頭に手拭を被つて、見慣れたままの様子である。其処は病院の横手で長い石垣がつづいている。このあたりは風が寒いので此様日には人通の稀な処である。私は声をかけようかと思ひ止つた。で反対の方向に走つた。私は遽かに好奇心が湧いた——早く家に帰つて留守の間に、総ての秘密を探つてやろう、大股に歩いて家に帰るといつの間やら婆さんは私よりも先に帰つて、やはり彼方向きになつて黙つて坐つていた。私はどつきりと胸にちよて、何も口に出す勇氣がなく二階に上るとどつかと其処に疲れた足を投げ出して、両手を組んで考えざるを得なかつた。

いったい下の婆は何者だろう——却つて茫然とした、あの罪がないような顔が、獐悪

の面構つらがまえ よりも意味ありげに思われて、一刻も居いたたま堪らない。それから私は思う所あつて、今自分が現にへやうちいる室の裡を隅から隅まで一々いちいちしら検べて見た。けれど青い壁紙と、いつ張り換えたか分からない黒く煤すすけた障子が目に映るばかりで、戸棚の隅などには埃ほこりが溜つてすずいる。鼠の喰い破つた穴が明いていて蜘蛛の巣が天井張にかかつて吊下ぶらさがつているのを見たり。鼠の喰い破つた穴が明いていて蜘蛛の巣が天井張にかかつて吊下ぶらさがつているの見たばかり……次に私は畳の上を検べて見たが、これとて、湿気臭いばかりで隅の足跡の触らぬ方が白く黴かびている。しかし私が心配したような血痕などは目に入らなかつた。もうこの畳は幾十年たつたか分らぬ程古かつた。又青紙はっの貼はってない黄色な壁の上には優曇華うどんげが咲いていた。この花が咲くというよと常と變つたことがあるという。……

晩方ばんがた、私は便所に行く時二階を下りて、婆さんに「大変寒くなりましたね。」と問いかけると、婆さんは又例の小さな咳を三つばかりやって、枯れた手で眼肉めじしの落ち窪りんだ両眼よめを擦こすつて、

「ア、大分寒くなつたな。」といったばかり。

この時、私はやはり普通の婆さんでしかないというより他は思われなかつた。何んで悪魔なもんか……普通の人の好い婆さんだと思つた。明る日、私は鉄工場へ行つた時仲間の者に向つて、

「何処か安い間があつたら移りたいと思うから探してくれませんか……何に今日や明日でなくつてもいそがなくてもよいのだから。」といった。

晩方家へ帰ると、その晩から私は発熱がして頭が重くなった。風をひいたのだ。明る日は工場を休んで臥ねでいた。また便所に行く時下りて、婆さんに今日は風をひいたから休んだといったら、それは罪のない笑い方をやって、

「へへへへへ。」と笑つて、やはり枯れた指ゆびさき頭で窪んだ両眼を擦つて、決して気の毒だとも何ともいわなかつた。

昼頃再び二階を下りた時に、私は、

「昨夜雨戸を閉めるのを忘れて眠たので風をひいたのだ。今日は咽喉のどが腫れましたよ。」と語ると婆さんはさも嬉しよろこばそうに、

「へへへへへへへへ。」と笑つて、枯れた指頭で両眼を擦っている。私は、

「この婆は冷酷な婆だな。」と白眼はくがんで睨んでやつた！

腹立しく思つて、私は二階へ上ると青い室の裡で臥ふでいて、ばたばたやつて熱のために苦しんだ。青い室が一時は黄色く見えて、熱のため眼しんの心が痛んだ。薄暗い室の中が熱臭くなつて、むうむうとする。私は毛布を頭から被つて耳みみたぶ朶の熱するのを我慢して早く風

を癒なほそうと思つて枕や、寝衣ねまきがびつしより湿ぬれる程汗を取つた。これで明日は癒りそうだ。ドラ腐敗した空気を新鮮な空気に入れ換ようと高窓を開けにかかると足がふらふらして床の上に倒れた。まだ日暮前であつた。その儘私は、腐つた空気の中で、五体が疲れたためすやすやと二三時間程眠つたのである。眼が醒めた時には、もう暗くなつていた。

高窓には、青い月の光りが射している。戸外そとは霜が降つて寒いと見て往来を通る人の下駄の音が冴えて聞える。まだ宵の口には相違ない。私はランプを点ともそうと思つて、手探りに四辺あたりを探したが分らなかつた。で、二階を降りて下を見ると、暗い鉛色のランプの下に白髪頭の老婆は、やはりいつもと同じ方向むかに對つて茫然ぼんやりとして坐つている。勿論長火鉢に相変わらず火の気がなかつた。身を切るように寒さが膚はだえに浸みだした。老婆は、痩せ細つた手をきちんと膝の上に重ねている——この時私は老婆の向いてる方向には、何かあるのではないかと思つたから、その方を見たが何も無い。ただその方角は鬼門で歳破さいは金神こんじんに當つていると思つたことと、暗いランプの光りに照されて隅の煤けた柱に頭の磨り切れた古ふる箒ほうきが下つていた。私は婆さんが、あの箒ほうきを見ているのかと思つた。

「どうも苦しくて死にそうでしたよ。」と唐突だしぬけにいつて、私は出来るだけ婆さんを驚かして、今少し複雑な情味ある話を聞きたいと思つた。婆さんは、また罪のない（私にはそ

う見える) 笑いをやって、

「へへへへへへへへ。」といって皺の寄った顔と凹んだ眼のあたりを枯れた血の気のない手で撫廻なでまわした。

「ひどい熱でした。死ぬかと思いました。」と極めて誇張して言つて、何うどいうか婆さんの返事が聞きたかつた。けれど婆さんは少しも騒いだ様子も見せずにへへへへと笑つて、たえず顔を撫で廻している。若もしこの婆さんの笑いが毒々しい笑いで、面付つらつきが獐どうあく悪であつたら私はこの時、憤怒ふんどして擲なり飛としたかも知れない。いくら怖しいといつたつて、たかが老おい耄ぼれた婆ばあでないか。けれどその笑いがいかにも罪がなく、無邪気であつた。で、何処か私の死んだ婆さんに似た処があつて恍然おつとりした処がある。私は、この老婆は果して罪のない老婆であろうか。それとも斯こん様に罪なげに見えるがその実腹の怖しい婆であるのか分らなかつた。

兎とに角かくこの笑いは謎だ! と思つた。

「医者にかかれば金が入るし困つたものだ。この分ではまだ明日も癒りそうもない。」といつた。けれど斯様ことを言つたつて、老婆はちつとも感じなかつた。へへへへへと無気味に笑つて、ひからび切きつた手で顔を撫で廻している。

私はまた死んだ祖母に向つて話しているような気がして、罪のない仏様のような婆さんだとも思つた。

けれども決してそうでない！ 先日病院の石垣の下で遇つたことや家に道具一つないことや、いつもこうやつて坐つていて、食物たべものを食つた様子も見ないことや、長火鉢に火の気のないことや——而してそこの老婆は子も孫もなく一人で生きていくことを考えた時、私はもはやこの老婆に捕われてしまつて、到底この家やから逃出すことが出来ない運命に陥つていられるように感ぜられた。

何、自分はただこの家の二階うちを借りていられるばかりだ。明日にも直ぐ逃げ出すことが出来るのだ。と思ひ直しても見たが何どうやら不安で、とてもこの老婆との関係が切れないようにも思われる。否決いなして関係でない。——其処なに何にも親しく語つたこともなければ、世話になつたこともない。少しばかりでも関係のあろう筈がない。ただ私はこの老婆を忘れることが出来ないのだ。

然しかり、とてもこの老婆を忘れることが出来ない。きつとこの老婆の姿が私の目先に付き纏つていられるばかりでなく、常に気にかかつて私の心が支配せられるだろうと考えた。

私は、火の気のない火鉢の側に坐つて、老婆と向ひ合つて、つらつら其様そんことを思うと

この老婆が憎くなった。

一つ困らしてやろうという念が萌した。

「お婆さん、何か薬がありませんか、苦しくてこうやって居られません。何か一つ薬を下さいな。」

と行って、とても薬なんか持っていないということを知りぬいているから、どういう返事をするか聞きたかった。婆さんは、少しも顔の相を変えなかつた。へへへへと笑いながら、枯れた手を延ばすかと思うと膝頭の火鉢の抽出を引き出した。私は慄として身に寒気を感じた。尚お延び上つて、暗いランプの光りで抽出を見詰めた。婆さんは中から薄青い紙に包んだものを取り出して、冷たな調子でいった。

「私は持病が起るとこれを飲むと骨節の痛むのが止る。これは病院にいる人がくれた毒薬じゃ。これを飲めば一思いに楽になるからそうなさい。」と私の手に渡した。

よく見ると、アヘンだ。私は頭から冷水を浴びせられたよりも戦い上つたが、此処だと思つて、度胸を据えて、戦える指頭で皺になつた薄青い袋から小さな紙包を摘み出して、包を開いて見ると中に白い粉薬が小指の頭程入つていた。私はその白い粉薬を見詰めて、何と云つてよいか。この時こそ婆さんは落窪んだ眼を箒から放して、私の顔の上に落してい

た。

何？ 戸棚の隅には鉄棒かなぼうが隠してあるんだ！ と心に幾たびか叫んで見たが、この粉薬から眼を放してきつと老婆の顔を見返す勇気が出なかつた。私は白い粉薬を見詰みつめていると、漸々だんだん気が変になつて、意識が茫然として来て、この儘この粉薬を自分の口に入ればしまいかと疑つた。——この時私は敢て顔を上げては見なかつたが——。

老婆は私が何どうするかと思つて、冷かに睨にらんでいるのが瞭々ありありと分つた。もう大分夜が更けたらしい。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集1 小説集※【#ローマ数字1、1-13-21】」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「新天地」

1908（明治41）年11月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老婆

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>